

(44)

氏名(生年月日)	多 ^タ 田 ^タ 羅 ^ラ 勝 ^{カツ} 義 ^{ノリ}
本籍	
学位の種類	医学博士
学位授与の番号	乙第796号
学位授与の日付	昭和62年1月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当(博士の学位論文提出者)
学位論文題目	川崎病の長期予後 第1編 当科における17年間の経過観察の状況 第2編 冠動脈後遺症, 左心室壁運動異常を残した症例について
論文審査委員	(主査) 教授 福山 幸夫 (副査) 教授 高尾 篤良, 教授 渡辺 宏助

論文内容の要旨

目的

近年, 川崎病の長期予後ということが大きな問題となってきた。そこで, 長期予後という観点から当科での17年間の経験をまとめた。

方法

昭和42年9月から昭和58年12月までの当科での急性期入院患児558例について, その後の外来受診状況, 冠動脈造影実施の有無を検討した。また心筋梗塞発症例, 死亡例については個々の管理状況などを検討した。

次に昭和48年5月から昭和59年12月までに当科で冠動脈造影を実施した393例中, 後遺症を残した91例を対象として, その長期予後を検討した。さらに左室造影実施例120例において壁運動異常の検討をおこなった。

結果

1. 急性期入院患児558例中359例(64.3%)が現在も経過観察されていた。冠動脈造影により後遺症無しと診断された症例のその後の外来受診率は約56%, 後遺症を残した症例のそれは95%であった。

2. 心筋梗塞発症例15例中, 抗血栓療法を施行していた6例は全例生存したが, 同療法未施行9例中4例(44%)は死亡した。

3. 死亡例は全体で7例あったが, 死亡時病日は, 発病1ヵ月以内3例, 3年以降3例, その中間は1例のみであった。

4. 造影により冠動脈後遺症の確認された91例中, 閉塞が13例, 再疎通9例, 狭窄18例, 他は動脈瘤のみで

あった。後遺症を残し発病後7年以上経過した症例26例は, いずれも現在のところ臨床的に問題はなかった。

5. 左室壁運動異常は, 冠動脈後遺症例45例中の15例に, また冠動脈正常例75例中の16例に認められた。また心筋梗塞例では検討された10例中7例で異常がみられた。異常例のうち12例で再検査が施行され, 4例改善, 1例悪化, 7例不変群であった。A-Cバイパス術により壁運動異常が改善した症例が2例あった。

考察

当科における急性期入院患児のその後の外来受診率は約60%と高率であり, これは本症に対する一般の関心の高さのあらわれと思われる。

心筋梗塞例の予後を見ると, 致命率は27%とそれ程高くなかった。しかし生存例で現在運動時心室性期外収縮が頻発する例があるなど, 管理にあたっては最も注意を要する。

冠動脈後遺症を有する症例で現在臨床症状を訴えている症例はなかった。一方バイパス手術により虚血性胸痛の消失した症例があり, 手術療法は本症の重要な治療法となりつつある。

左室壁運動異常の原因としては, 心筋梗塞, 心筋炎があげられ, 特に冠動脈造影正常例では心筋炎の関与が大である。このような壁運動異常は変化するものであり, 検査を反復施行する必要がある。

総括

当科における17年間の川崎病経験例をまとめた。

急性期入院患児558例のうち約60%の症例が現在も経過観察されていた。15例の心筋梗塞例、7例の死亡例があった。

冠動脈後遺症は91例で確認されたが、いずれも現在のところ臨床的には問題なかった。

左室壁運動異常例は、冠動脈後遺症例45例中15例、正常例75例中16例で認められた。異常例中12例で再検査がおこなわれ、7例で改善、1例で悪化が確認された。

論文審査の要旨

川崎病は、当初の考えと異なり、一部の症例に重篤な合併症を来すことが近年判明したが、長期予後については、不明のままであった。本研究は過去17年間に、その急性期に当科へ入院した川崎病患児558例について、その後の外来受診状況、後遺症の有無を追求し、死亡7例、心筋梗塞15例、冠動脈後遺症91例の存在を確認した、学術上価値ある研究である。

主論文公表誌

- 1) 川崎病の長期予後(第1編)―当科における17年間の経過観察の状況―
日本小児科学会雑誌 第90巻 第5号
1087～1091頁(昭和61年5月1日発行)
- 2) 川崎病の長期予後(第2編)―冠動脈後遺症、左心室壁運動異常を残した症例について―
日本小児科学会雑誌 第90巻 第5号
1092～1099頁(昭和61年5月1日発行)

副論文公表誌

- 1) 間質性肺炎で死亡した川崎病の1女児例
小児内科 15(9) 1349～1351(1983)
- 2) 冠動脈後遺症を残した川崎病の治療管理 当科における16年の経験より
小児科臨床 37(3) 495～500(1984)
- 3) 川崎病の冠動脈後遺症 特に狭窄、閉塞性病変を中心にして
小児科臨床 37(3) 501～506(1984)
- 4) 川崎病の急性期治療研究 aspirin, flurbiprofen, prednisolone+dipyridamoleの3治療群による prospective study
日児誌 87(12) 2486～2491(1983)

- 5) 川崎病の急性期治療研究(第2報) aspirin, flurbiprofen, prednisolone+dipyridamoleの3治療群による prospective study, 発病1年の時点での成績
日児誌 89(4) 814～818(1985)
- 6) 川崎病の急性期治療研究(第3報) aspirin, flurbiprofen, prednisolone+dipyridamoleの3治療群による prospective study
日児誌 90(8) 1844～1849(1986)
- 7) 川崎病の臨床症状
日児誌 89(11) 2548～2554(1985)
- 8) 川崎病不全型に対する診断上の問題点
Prog Med 6(1) 150～154(1986)
- 9) 川崎病心筋梗塞救命例の長期観察
小児科臨床 39(2) 347～351(1986)
- 10) 川崎病における心筋梗塞の臨床症状
Coronary 2(4) 484～487(1986)